様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(A)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｈ０１８７４

研究課題名（和文）大学における「アート・リソース」の活用に関する総合的研究

研究課題名（英文）Utilization of Art Resources in University

研究代表者
五十殿　利治（Omuka, Toshiharu）

筑波大学・芸術系（特命教授）・特命教授

研究者番号：６０１７７３００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　35,000,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究はそれぞれキャンパスの大小や大学ミュージアムの有無等について、背景を異にする6大学の班によって実践されたが、3年間の研究結果として、大学における教育研究資源としての「アート・リソース」とは、ただ単に美術作品のみを指すものではなく、多種多様な形式において存在することが明らかとなった。植物標本から大学校舎まで、さらには実体のない「記憶」まで、そのカテゴリーは開放的なものであり、それゆえに教育研究に多彩に活用することが可能である。ただ、その一方で、その開放性は「アート・リソース」の定義をあいまいにする面があることも否めないので、今後の課題としてこの点でのさらなる検討が必要である。

研究成果の概要（英文）：This study is perfomed by six groups from those universities which are different in land area of campus and with or without university museum. After three-year researches, it became evident that the art resource as education and research property in university is extant in various forms, not only as an art work. The category of art resource is open, ranging from hortus siccus to university building, even to intangible "memory" and so it can be utilized in various ways in education and research. On the other side, it cannot be denied that this kind of openess makes vague the definition of the art resource. In this respect its definition requires further researches.

研究分野：美術史

キーワード：アート・リソース　大学美術館

１．研究開始当初の背景

芸術系の専門的な教育組織のある大学は別として、一般に総合大学において美術作品は展示される機会が少ない。しかし、大学には美術作品が所蔵されており、構内の諸施設に飾られている絵画や彫刻等が少なくない。そこで、いわゆるコンテンツ等を含めて、学内に蓄積されている美術的な教育研究資源を、「アート・リソース」として位置づけ、これを教育研究のみならず、社会貢献に活かす方策について総合的研究を行うのが本研究の目的である。

２．研究の目的

一般に大学には多様な教育研究資源が蓄積されているが、美術に関係する「アート・リソース」も活用すべき資源として見逃せない。現在多数の大学ミュージアム（美術館博物館）が設置されているが、本研究は大学ミュージアム、そして大学ミュージアム以外においても、この美術に関係する資源を展示・公開し、また情報発信し、教育研究のみならず、大学の社会貢献に活用する方策について総合的に調査研究するものである。実施にあたっては、これまで実績のある研究グループが共同研究のためのプラットフォームを構築するとともに、各大学の置かれた状況の相違を十分に織り込み、国内外の連携を推進しながら、研究成果を広く公開し、発信することを目指す。また大学の美術に関する方針、「アート・ポリシー」の提言に結びつけることを目標とする

３．研究の方法

（１）大学において活用可能な教育研究資源として「アート・リソース」の概念について、明確化し、大学の教育研究のみならず、広く社会貢献に資する方策についても調査研究を進める。

（２）拠点ごと（6 班による研究体制）に明確な研究目標を設定しつつ、拠点間の緊密な交流と密接な交流を通じて、共同研究としての成果を深める。

（３）芸術系学部・大学院の有無、大学ミュージアムの有無、大学規模の大小など、各拠点が置かれた相異なる状況に即して柔軟な研究活動を行いつつ、その成果が当該大学班にのみ妥当するような閉鎖性や特殊性を回避するとともに、連携の具体的な方式を探る。

（４）国際研究集会を毎年開催し、先進事例を学びつつ、国際連携による発信力を強化する。

４．研究成果

筑波大学班においてはアート・リソースの概念についての基礎研究、そしてアート・リソースの教育研究資源としての実践的な活用について調査研究を進め、その結果を筑波大学「総合造形」コースについての展覧会開催に反映させることを主要な目的とした。第一については毎年研究誌「ユニヴァーシティー・アート・リソース研究」を刊行して、多様な側面からの検討結果を公開した。また第二については茨城県近代美術館における展覧会（2016 年 11 月）に協力し、図録にも研究成果の一部を発表することになった。さらに最終年度にはドイツ、デュッセルドルフで開催された展覧会の写真パネルを大学が寄贈されていたので、その一部を活用した再現展示を試みた。

九州大学班は、2015 年度には、新キャンパスへの移転が続く中、破壊や亡失の危機に直面している九州大学所蔵の美術作品の調査研究を継続して行い、その実態の把握と保全に務めた。その成果をもとに、2016 年度には、福岡県立美術館の協力を得て「九大百年　美術をめぐる物語」展を開催し、九大百年の歴史の中で培われたアート・リソースの全体像を考察した。同時にシンガポール南洋理工大現代美術センターや韓国・東国大学博物館の関係者をパネリストに迎えた国際シンポジウム「大学と美術の可能性を求めて」を開催しアジアにおける大学のアート・リソース活用の可能性と課題について議論した。

これらと並行して、文学部と九州大学総合研究博物館の連携により、授業の一環として、アート・リソースとしての大学所蔵文化財を用いた企画展「そして はこぶねは ゆく」などを開催した。一般に学術資料と考えられてきたものを「美術」として再定義し「美術展」とすることで、「広義のアート・リソース」としての大学学術資料について、展示実践において検討し、教育資源しても活用を計った。

大阪大学班では、初年度、大阪大学総合学術博物館第 8 回特別展「待兼山少年–大学と地域をアートでつなぐ《記憶》の実験室–」と海外アーチストのパフォーマンス「発酵曼荼羅」と連動してアート・リソースの概念とその受容のあり方を考察し、豊中キャンパスのアート・リソースの基礎調査を進めた。2016 年度、加えて吹田キャンパスや本学発祥の中之島の調査、写真撮影を行い、“記憶”のくさび」「漂流するモニュメント」などの概念を提起した。特に「エルレメンス記念碑」「巨美不滅」など近代の記念碑、国立国際美術館から移された彫刻群、70 年大阪万博と関連したモニュメントの調査から、阪大キャンパスにおけるアート・リソースの意義を検証した。2017 年度は、本学と万博の関係を踏まえて学内のアート・リソースを検討することで、北大阪地域に大学や研究機関が集積された歴史的展開を探り、同時にキャンパス内に展示される本学出身の洋画家・中村貞夫の画風展開を追跡して、本学におけるアート・リソースの設置経過を歴史軸に沿って解明した。なお中村が戦前のモダニズムを継承しつつ、具体美術協会などアンフォルメルとも連

動し、大阪の美術史と同調した美術家であることを検証した。

名古屋大学・名古屋芸術大学班では，情報科学の知見をもとに「アート・リソース」発見と鑑賞のためのシステムを開発し，名古屋大学のプロジェクトギャラリー「clas」を「アート・リソース」のための実験，展示と研究公開の拠点として活用を図った。

アート・リソースとメディア研究会を，2015 年に「イメージ愛好と都市、大学」、2016 年は「非物質 2016，イメージとしての言語――ジャン=ルイ・ボワシエ氏を迎えて」の題目で開催した。2017 年には，国際シンポジウム「アート・リソースとディジタルメディアの活用」を開催した。また「アート・リソース」発見と鑑賞のためシステムを情報技術の知見にもとづいて、過去の展覧会を再体験するシステムを AR 技術を使用して試作した。続いて ICT を用いた歴史遺構アーカイブデータ活用のシステムをスマートフォンアプリケーションとして開発した。

一方、「clas」の運営を通じてその実践的機能を点検し、「アート・リソース」の発見の眼差しを育むべく，継続的に実験と展示をおこなった。また，学内におけるアート・リソースの一つ水谷勇夫の作品《神と獣》（1965）を再発見し、作品調査を行うとともに、その存在を地域に紹介した。

慶應義塾大学班「アート・リソース」としての学校建築についての研究を進めた。大学の建築を「アート・リソース」と位置づけた研究を行った。具体的には他大学調査も含めた学校建築を「アート・リソース」化するための基礎調査（データ整備・写真撮影）と建築リテラシーの向上を目的としたプログラム実施、最終年度の成果発表としての展覧会を行った。

基礎調査としては、学内建築の写真撮影および図面、関連印刷物調査に加えて甲南女子大学（村野藤吾設計）などの調査を行い、建築関連資料の充実を図った。建築リテラシーの向上及び、学校建築を「アート・リソース」として学外にも開く試みとして建築公開プログラム「建築プロムナード」を 3 カ年にわたり実施した。慶應義塾三田キャンパスの重要文化財演説館を含む建築の公開日を設け案内シートを作成、年を追ってガイドツアーの実施やオーディオガイド作成、英語対応などを実現した。また、2016 年度には「転位する部屋」としてレクチャーと建築公開を組み合わせた試みを実施。同年には建築についての意識問題をテーマとした研究フォーラム「建築のマージナリア」も実施した。最終年度には展覧会「信濃町往来―建築いま昔」を開催、当該建築の撮影場所での展示実現を目的として医学部・病院のある信濃町キャンパスで実施した。

山形大学班では、およそ 89 年の歴史をもつ山形大学附属博物館は 2015 年に旧施設から新築建物への移転を果たした。新たに獲得した活動の場を大学の教育・研究活動ならびに地域貢献活動の中核的拠点として強化するために「学生と市民の参加による附属博物館の施設とアート・リソースの活用」を研究テーマとした。初年度はリニューアル事業を通して学生および市民参加の博物館活動を模索し、2016 年度は学生主体の特別展を複数実施し、学生参加の方法論の確立を目指した。最終年度である 2017 年度は市民参加の在り方を検討するとともに国際シンポジウムを実施した。

この 3 年間の活動によって、博物館は大学の顔として高校生および来賓の受け入れ先となり、博物館に関する科目以外での授業等の利用も増加し、学内における認知度は着実にあがっている。市民との協働に関しても、市民団体の活動に博物館のノウハウおよび学術的情報の提供で協働するという形ができつつある。そして最終年度に実施した国際シンポジウムの成果をもとに、国内外の大学博物館を視野に入れた、情報発信活動を進めていくこととなった。手始めに国立歴史民俗博物館と学術交流を締結し、収蔵資料のデジタルアーカイブ化を進めていく予定である。

山形大学班のアート・リソースは資料および教員・学生などの人材であり、活用とはそれらが博物館において交流し、新たな価値を創造していくことである。研究テーマはある程度達成できたと考えている。

なお、以上の各班における研究成果をまとめた展示を筑波大学芸術系ギャラリーにて 2018 年 1 月より 3 月まで実施した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　16　件）

① 小林俊介、佐藤琴、山形大学附属博物館について―リニューアルと参加型の運営にむけて、ユニヴァーシティー・アート・リソース研究、査読無し、I、2016、pp. 23-32

② 後小路雅弘、山中理彩子、「九大百年　美術をめぐる物語」展へ向けて、ユニヴァーシティー・アート・リソース研究、査読無し、I、2016、pp. 4-22

③ 橋爪節也、「阪大石橋宿舎おみおくりプロジェクト」『待兼山少年―大学と地域をアートでつなぐ《記憶》の実験室』と「Webbing Project」、ユニヴァーシティー・アート・リソース研究、査読無し、I、2016、pp. 40-71

④ 本間友、森山緑、慶應義塾三田キャンパス　建築プロムナード、ユニヴァーシティー・アート・リソース研究、査読無し、I、2016、pp. 72-80

⑤ 五十殿利治、寺門臨太郎、田中佐代子、村上史明、「アート・リソース」考、ユニヴァーシティー・アート・リソース研究、査読無し、I、2016、pp. 103-116

⑥ Motoyama Kiyofumi, Considering the

Significance of the University Gallery through an Experimental Exhibition, International Journal of the Inclusive Museum, 査読有り、vol. 9, 2016, pp. 65-77
⑦ 森山緑、「鎌鼬」再考―田代、1965/2016、慶應義塾大学アート・センター年報、査読無し、23 巻、2016、pp. 136-144
⑧ Homma Yu, Hijikata Tatsumi,around 1980: Beyond the Walls of Asbestos-Studio, 慶應義塾大学アート・センター年報、査読無し、23 巻、2016、pp. 145-148
⑨ 三島美佐子、金平亮三と植物描画、「九大百年　美術をめぐる物語」研究論集、査読無し、2016、pp. 105-109
⑩ 後藤文子、近代園芸学とオストヴァルト色彩論、美学、査読有り、67（1）、2016、pp. 61-72
⑪ 栗田秀法、旧美学美術史研究室（名古屋大学）設置の水谷勇夫作品について（中間報告）、ユニヴァーシティー・アート・リソース研究、査読無し、II、2017、pp. 93-94
⑫ 渡部葉子、建築を啓く―「慶應義塾の建築プロジェクト」、三田評論、1214 号、2017、pp. 26-31
⑬ 後小路雅弘、東南アジアの大学におけるアート・リソースの活用、ユニヴァーシティー・アート・リソース研究、査読無し、III、2018、pp. 17-28
⑭ 橋爪節也、キャンパスの“土壌改良”とアート・リソース、ユニヴァーシティー・アート・リソース研究、査読無し、III、2018、29-40
⑮ 江口みなみ、展覧会「DADA in Japan」関連資料のあゆみ、ユニヴァーシティー・アート・リソース研究、査読無し、III、2018、pp. 95-98
⑯ 林みちこ、The International Society of Sculptors Painters & Gravers と日本人芸術家、藝叢、査読無し、33 号、2018、13-19

〔学会発表〕（計　15　件）
① 後小路雅弘、東南アジアにおける美術史学の成立について、第 37 回アジア近代美術研究会、2015 年
② 三島美佐子、松村順治、内海泰弘、堀優子、金平亮三の教育研究史：教育研究資料からの精査（予報）、日本博物科学会、2015 年
③ Takuya Inagaki, Kiyofumi Motoyama, Interactive Onsite Application of Museums' Art Collections and Image Connectivity, Inclusive Museum 2015, 2015 年
④ 本間友、研究アーカイヴとデータベース：「研究来歴（Research Provenance）」蓄積と活用、アート・ドキュメンテーション学会年次大会、2016 年
⑤ 佐藤琴、軽やかな博物館を目指して　山形大学附属博物館のリニューアルから見えてきたこと、日本ミュージアムマネージメント学会、2016 年
⑥ Homma Yu, Connecting the Cultural Narratives: Performance/Conference, Narrative and Land, Performance Studies International Annual Conference, 2016 年
⑦ Omuka Toshiharu, Early Career of Yamaguchi Katsuhiro, Moving Images Culture in Asian Art, 2016 年
⑧ 橋爪節也、大学の歴史と大学ミュージアム、日本体育図書館協議会オープンセミナー、2017 年
⑨ 茂登山清文、ICT を用いた歴史遺構アーカイブデータの活用、日本図学会中部支部冬季例会、2017 年
⑩ Endo Mari, Motoyama Kiyofumi, Yasuda Takami, An Application to Compare the Past and Present of Townscape, EUROGRAPHICS Workshop on Graphics and Cultural Heritage 2017
⑪ 渡部葉子、出来事から出来事へ　何が行われたのか、そしてそれを今どう見るのか？岐阜おおがきビエンナーレ 2017 シンポジウム、2017 年
⑫ Yu Homma, Unfolding Cultural Narratives of City: University's Museum and Cultural Resources in Local Area, 17th Annual UMAC Conference, 2017
⑬ 本間友、大学ミュージアムとダイバーシティ：コレクション・人・場所をひらく、美術史学会、2017 年
⑭ 佐藤琴、市民と共働する大学博物館　大学の「アート・リソース」の活用、日本博物科学会、2017 年
⑮ 三島美佐子、活動コンテンツに関するデータベース化の現状と課題、日本博物科学会、2017 年

〔図書〕（計　2　件）
① 後藤文子、共感覚から見えるもの―アートと科学を彩る五感の世界、2018 年、pp. 125-151
② 橋爪節也、竹中哲也、精神と光彩の画家中村貞夫　揺籃期から世界四大文明を超えて、2018 年、p.114

〔その他〕
ホームページ等
大学におけるアート・リソースの活用
http://www.geijutsu.tsukuba.ac.jp/~artresources/

６．研究組織
(1)研究代表者
五十殿 利治（OMUKA Toshiharu）
筑波大学・芸術系・特命教授
研究者番号：60177300

(2)研究分担者
後小路 雅弘（USHIROSHOJI Masahiro）
九州大学・人文科研究院）・教授
研究者番号： 50359931

三島 美佐子(MISHIMA Misako)
九州大学・総合研究博物館・准教授
研究者番号：30346770

茂登山 清文(MOTOYAMA Kiyofumi)
名古屋芸術大学・芸術学部・教授
研究者番号：10200346

橋爪 節也（HASHIZUME Setsuya）
大阪大学・総合学術博物館・教授
研究者番号：70180817

栗田 秀法（KURITA Hidenori）
名古屋大学・文学研究科・教授
研究者番号：10367675

渡部 葉子(WATANABE Yoko)
慶應義塾大学・アート・センター（三田）・教授
研究者番号：00439225

後藤 文子(GOTO Fumiko)
慶應義塾大学・文学部（三田）・准教授
研究者番号：00280529

寺門 臨太郎(TERAKADO Rintaro)
筑波大学・芸術系・准教授
研究者番号：80334845

佐藤 琴(SATO Koto)
山形大学・基盤教育機構・准教授
研究者番号： 20620941

(3)連携研究者
田中 佐代子（TANAKA Sayoko）
筑波大学・芸術系・教授
研究者番号：10326415

林 みちこ（HAYASHI Michiko）
筑波大学・芸術系・准教授
研究者番号：40805181

村上 史明(MURAKAMI Fumiaki)
筑波大学・芸術系・助教
研究者番号：30512884

江口 みなみ(EGUCHI, Minami)
筑波大学・芸術系・研究員
研究者番号：90753210

横田 洋(YOKOTA Hiroshi)
大阪大学・社学共創本部・助教
研究者番号：50513115

松永 和浩(MATSUNAGA Kazuhiro)
大阪大学・適塾記念センター・准教授
研究者番号：90586760

本間 友（HONMA Yu）
慶應義塾大学・文学部・講師（非常勤）
研究者番号：00650003

森山 緑（MORIYAMA Midori）
慶應義塾大学・アート・センター（三田）・講師（非常勤）
研究者番号 20779326

小林 俊介(KOBAYASHI Shunsuke)
山形大学・地域教育文化学部・教授
研究者番号：50292404